



狩猟という言葉を見聞きしたとき、みなさんはどんなことを連想するだろうか。多くの人がイメージするのは、人間を襲う獣を退治する「害獣駆除」の方面だろう。近年、都市部での熊の目撃が増えており、実際に襲われる事件も増加している。そのため、マスコミでは、狩猟のたったその一面だけにフォーカスされることが多い。しかし、狩猟には、他にもたくさんの魅力が存在する。

だからこそ、今回の『らいぶらりい』では狩猟をテーマに、その一面だけでなく狩猟の多面性を紹介していく。()



狩猟といえば、銃で獣を撃って殺すこと。僕はそう思っていた。みなさんもそう思っていたかもしれないが、狩猟には大きく分類して5種類の猟法がある。まずは、狩猟というものを知らることから始めよう。

狩猟を始めるきっかけは、ジビエをたくさん手に入れるため、運動不足解消、人気者になるためなど人それぞれだ。狩猟には、レジャーとして楽しむ側面もあるが、野生動物から農業地や街を守る害獣駆除という重要な目的も持つ。実は、人間社会と自然界の境界線は、「狩猟圧」という拮抗力で保たれているのだ。この猟圧を発生させるために、自然界と特に関わりが深い「猟師」は重要な存在で、人間界と自然界の間の番人なのだ。つまり、きっかけは違えど、狩猟を始めるその一歩が日本のためになっているのだ。

それでは、次に現在の猟法の分類（ハンティング）について見ていこう。私たち一般人は「猟は昔に行われたもの」と思いがちだ。しかし、道具や装備などは大きく変化しながら現代まで続いている。現在の猟法は、大きく分類すると右図に記している5つだ。“大きく分類する”と5つだが、細かく分けると無数の方法があると思えば、衝撃を受けるはずだ。それぞれの方法にはっきりと特徴があり、猟師は己にあったスタイルで狩猟を行っているのだ。かつての狩猟は、秀でた運動能力や特別な才能・センスが必要であった。しかし、今の狩猟は方法が確立されているため、能力を習得するよりかは、手法をよく理解することで行えるように変化したのだ。野山を駆け回りながら散弾銃でする猟、優雅に自然を嗜みながらエアライフルでする猟、足跡や糞などの手がかりから野生の謎解きをしつつ罠でする猟。今挙げた例だけでも、狩猟というものがいかに多様で奥深いものかが伺えるだろう。

このように変化をしてきた狩猟だが、命を奪う行為であるから動物に対する畏敬の念は忘れてはならない。自然や生命に対する深い感謝が必要なのだ。猟師は、山に入るときや獲物を狩ったときに、折りを捧げることがある。これは、山の神に対する折りだ。これから狩りをすることの心構えを作ったり、動物を狩ったことへの許しをもらったり、人によって折りの内容は様々だ。また、ツノ、毛皮ばかりか、内臓などもすべて利用し、一頭まるごと無駄にはしない、無駄になるような個数は獲らないという精神がある。動物と密接に関わっているからこそ感じる、生命への畏れや感謝などがあるのだろう。狩猟は命について考え直すきっかけになる。

狩猟は、言うなれば「トータルアウトドア」と呼び表せるだろう。それほどにさまざまなアウトドア要素を詰め込んだ世界だ。獲物を求めて登山もするし、山中でガスコンロを使って料理もする。山の天気のことや、地形図の読み方などを知らなければ帰宅できないなんてこともある。命をいただくということは、自分が命がけであるということだ。() *1,2,3



らいぶらりい

札幌市豊平区月寒東1条3丁目
北海道札幌月寒高等学校図書局

編集:



目次:

狩猟 is 何 おすすめ本	1P
狩猟のリ・ア・ル 月高生の声 アイヌ 狩 熊熊自適 エゾシカFuture	2・3P
肉食 草 THE knife 狩猟 is forever	4P

おすすめ本



『山と獣と肉と皮』

繁延あづさ 著/垂記書房

作者の繁延さんは、写真家として、狩猟の現場である山に行くことになり、目の前で命を狩られるイノシシを見た。そのイノシシは箱罠にかかっていたのだが、もちろん「死んでたまるか」とばかりに目を刺いて、抵抗していた。そして激しく叫んでいた。しかし、狩られた瞬間に、ロウソクの火がふっと消えるように静まったのだった。彼女は、その時のことを「生と死のコントラストの変化が急激すぎて、頭が追いつけない。」と綴った。

僕は、こんな光景を目にしたことはない。しかし、実際に箱罠の中のイノシシの写真を見たとき、まるでその場にいるかのような臨場感を感じた。この本はまさに、ありのままの「狩猟」の現場であり、命の力強さやありがたさという言葉では形容できないような感情を僕に与えた。心苦しいシーンもあるが、その中に、山への愛、獣への愛、肉への愛、皮への愛。すべてを感じられる一冊だ。()